現在の出来事の背後の歴史

小森　陽一
学校法人和光学園理事長

現在の仕事に就くことが決まる頃、ロシアのプーチン政権は、国際法違反のウクライナへの軍事侵攻を始めた。この文章を書き始める頃、プーチン政権は、東部のルハンスク州やドネツク州などを、住民投票賛成多数の結果と称して、ロシアに併合した。

ロシアによるウクライナ侵攻の現地からの映像がテレビニュースで放映される度に、日本語のナレーションが入るまでの数秒間、ロシア語やウクライナ語が聞こえてくる。

そのとき、自分の意志にかかわらず、子どもの頃の記憶が蘇ってくることとなる。

チェコスロヴァキア（当時）の首都プラハにあった、世界労働組合連盟の本部に勤務することになった父親の仕事の都合で、私は小学校2年生の1961年から足掛け5年間、在プラハソヴィエト大使館附属（八年制）普通学校に通うことになった。この学校の詳細については、私たちが行く1年前からプラハに住んでいた米原万里さんの『オリガ・モリソヴナの反語法』をお読みいただきたい。

郊外の自宅から学校に通う市電の車窓からは、父親の職場の近くにあるレトナ広場にそびえる巨大なスターリン像を見上げていた。1961年10月のソ連共産党第22回党大会で、スターリンの遺体をレーニン廟から除く決定が採択されたことを校長先生の全校演説で開いて、子どもながらに驚いた数日後、スターリン像は爆破されて、瓦礫の山となっていた。

当時のフルシチョフ首相によるスターリン批判は、1956年のソ連共産党第20回大会から行われていたということがわかったのは、かなり後になってからであった。このスターリン批判をめぐっては、「中ソ対立」と後に歴史化される理論的対立が、核兵器開発をめぐる国家対立になっていった。

米原万里さんから当時教えられていたことであったが、それまで在プラハソヴィエト

ずいそう Occasional thoughts

大使館附属普通学校には、中華人民共和国のプラハ駐在員の子どもたちも通っていたのだが、一斉にいなくなったということであった。

アジア系の生徒は、私たち日本人とモンゴル人しかいなかった。朝鮮民主主義人民共和国の子弟も、中華人民共和国の子弟と行動を共にしたとも聞いた。

複雑な共産党間の路線対立について十分理解していたわけではなかったが、2つのアジアの社会主義国の大使館からは何度も招待を受けた。

私と5歳下の妹にとっては、両大使館からの招待は何よりの楽しみだった。妹は自宅近くのチェコの幼稚園に通っていたのだが、チェコ料理もロシア料理もジャガイモ中心の脂っこくて大味であり、2人ともうんざりしていたのである。

それに対して両大使館の料理では、炊かれた白米で懐かしい味噌や醤油の味を楽しむことができたのである。食事が終わると大人たちは難しい政治の話をしていたのだろうが、私たち兄妹は、大使館の映画室で、子ども向けアニメーション映画を好きなだけ視聴できた。

両大使館は、ソヴィエト大使館もあるレトナ広場の近くの高級住宅街にあった。レトナとは、「夏の」という意味のチェコ語で、対ドイツ戦勝利をはじめとする様々な記念日のソ連・チェコ両軍の軍事パレードがこの広場で行われていた。

この1961年まで、州都ドネツクはスターリノと呼ばれていた。個人崇拝を禁止していたレーニンが死んでからの名称であり、それまではユーゾフカという都市名であった。ルハンスクは、同じ時代ヴォロシロフグラードと呼ばれていた。ヴォロシロフは、スターリンの盟友である。現在の出来事の歴史的背景が鋭く問われる日々を私たちは生きている。